

## 青森支部 受賞校合同贈呈式・論文説明研修会 活動報告

1. 日時：2月11日（木）9：10～15：45
2. 会場：八戸市視聴覚教育センター・児童科学館
3. 参加人数：23名
4. 司会：青森支部事務局長 久保慶喜

今年度は、建国記念の祝日に開催することになったが、午後は論文応募説明の他、研修もあるということもあり、多くの会員が参加し、次回への見通しを持てる、有意義な研修会とすることができた。

### 9：20～ 9：50 ソニー子ども科学教育プログラム受賞校合同贈呈式

今年度はソニー科学教育財団から武藤氏、ソニーマーケティング株式会社北日本営業本部から澁谷氏をお招きした。贈呈式の前にお二方からご挨拶をいただき、その後、青森支部河原木聡支部長（八戸市立町畑小学校 校長）からお礼の言葉があった。そして、三校一園の代表者に賞状と副賞の目録が手渡された。最後には、SSTAの工藤隆継常任理事（南部町立名久井小学校 校長）から、支部における応募・受賞状況の講評があった。七校の受賞があった昨年に比べ、今年度は受賞校が減少してしまったことに触れ、応募校を増やし、さらに上位も狙いましょうと参会者に向けての激励があった。

### 10：00～12：00 受賞校論文概要発表

南部町立名川幼稚園 江差家千佳子先生・黒坂正子先生・松井ルミ子先生

今回、唯一、園での入賞となった名川幼稚園。支部で幼稚園が入賞したのは二度目ということもあり注目を集めた。「科学する心を育てる」という主題で取り組まれた実践は「栽培」「科学活動」「ふるさと」「飼育」「ものづくり」の5本柱から成り、豊かな自然環境を生かし、特色ある取り組みがなされていた。特に、講師を招いての科学集会や名久井小との幼小連携を生かした「出前科学教室」は、科学する心をはぐくむ実践発表であった。



七戸町立天間西小学校 上山 香子 先生

上山先生は昨年度の実践を修正、継続した「めきめき科学プラン」を発表した。4つの仮説を「おどろき」「ひらめき」「ときめき」「きらめき」と場面ごとに銘打って、前年度より、より進化した科学を好きな子どもを育てるテーマ・実践計画を展開した。



八戸市立番屋小学校 蛭田 健 先生

今年度初受賞となった番屋小だが、小規模校の特性を生かした独創的な取り組みが多く見られた。特に、科学が好きな子どもを育てる教育構想にある、めざす子ども像「夢に向かってチャレンジする、知的好奇心あふれる子ども」が、一人一人の姿にしっかり現れていると感じられた。自然豊かな学校環境を有効に生かし、そのまま、子どもたちに豊かな原体験を保證するプログラムが緻密に織り込まれていた。



南部町立名久井小学校 久保 慶喜 先生

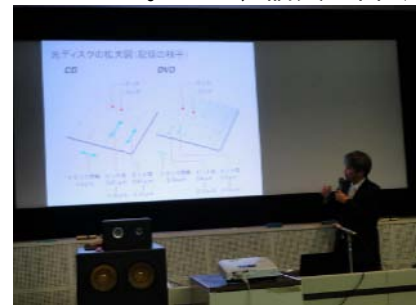
今回5年連続受賞を果たした名久井小学校は、今年度、これまでの実践で残された課題を解決するため、「名久井スーパープラン」を提案した。科学力が高い子どもを目指すこのプランは、科学史導入の完全実施などの計画が示されており、参会者の興味・関心を引く内容であった。また、実験を実演発表をするなど、参会者を引き込む発表であった。



13:00～14:30 ソニー子ども科学教育プログラム論文応募説明会

講師 ソニー教育財団 武藤 良弘 氏

武藤氏は、井深大氏の会社設立の理念の話からきりだし、小学校理科で扱う内容が、どれほど日常生活での現象や製品の中に生かされているのか、クイズ形式でお話をして下さった。このことは、小学校の科学教育の重要性を改めて確認することとなった。また、論文を書くということについて、考えているだけでは不十分であり、表現して初めてSCIENCEになると話された。そのために大切なことは、日々の実践をありのままに表現すること、内容の充実は継続することを通して進めること、研究論文でないので、普段している実践を平易な言葉で表現することなどをポイントとして教えていただいた。



14:30～15:30 論文応募についての研修

「論文の骨組みを書いてみよう」

講師 SSTA常任理事 工藤隆継（名久井小学校 校長）

「論文の骨組みを書いてみよう」というテーマの演習は、まず、理科教師として自分たちのあり方を見直すことからスタートした。理科教師としての二面性に触れたのち、理科教師として資質を高めることの大切さや、これから求められる理科教師の姿を示して下さいました。その後、名久井小の実践を例にしながら、学校教育目標との一体化の工夫や取り組みの柱立て、25ページの組み方などを具体的に話された。5年連続受賞の実績ある学校の事例だけに、参会者は、取り組みへの不安を自信に変えることのできる有意義な研修となった。



15:30～15:45 閉会行事

合同贈呈式・論文概要発表・論文応募説明会・論文作成会と盛りだくさんであった研修の締めくくりとして、「次年度の論文応募数は18校」という具体的な目標が示された。また、その後の受賞祝賀会では、「科学が好きな子ども」「科学する心」をどのように育てていけばよいのか、具体的な子どもたちの姿に沿った熱い議論や情報交換がなされた。

降りしきるみぞれまじりの雪の中、最後までお付き合いくださった財団の武藤さん、本当にありがとうございました。

（文責 湊尚人）